
滅し屋～夜空に咲く花～

天川 涼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

滅し屋〜夜空に咲く花〜

【Nコード】

N1011D

【作者名】

天川 涼

【あらすじ】

この世に霊はいる。だからそれを”滅ぼす”者もいる。副業、高校生。本業、滅し屋。2つの顔を持つ2人は、霊を滅ぼすため今日も夜の街を駆ける！

第1話　それが彼らの日常

「私は、息子には常に自分以外の人のために行動してほしいな。ね？」

その約束を思い出したのは、死んでから3日目の朝

『よし、そっちの公園に追い詰めたよ宗一』

押し当てた携帯から修吾の息切れした声が聞こえてくる。

子供も寝てれば大人も寝てる午前3時。

俺と修吾は真っ暗なこの街の片隅で、1対2の夜の鬼ごっこをやっていた。

もちろん比喻だ。

追う側の俺たちが鬼じゃないからではない。

追われる側が、人間じゃないからだ。

「後は任せろ」

修吾の声を聞いた後、俺は電話を切る。

そして電話を切るとちょうど、公園で待つ俺の前に『そいつ』はやってきた。

中肉中背。

背広を着ている。

頭がバーコード。

どこにでもいる普通のおっさん。

見た目だけは。

「はじめまして”幽霊さん”」

皮肉を込めた俺の物言いに、今公園の入り口からやってきたばかりの”幽霊”は本能からか俺を敵だと察しこれ見よがしに怯えた表情を見せる。

おびえているのは本当だろうがやりすぎだ。それで油断したところ

ろを殺そうって狙い見え見えの、下手な演技である。

俺が高校の制服を着ているからってなめてるんじゃないかな？
それでも俺は学生が副業で、本職は立派にあんたと敵対しているわけなのだが。

「ご大層な演技ありがとよ、幽霊さん。今お金持っていないから、かわりに成仏させることで払うわ」

俺はゆっくりとした口調でそう宣告する。

演技なんて通用しない。

それを俺の言葉から悟ったのか、幽霊は何事か奇声を発しながらその容姿からは判断できないような速いスピードで突如俺に迫ってきた。

手に持っているのは、刃渡り十数センチと見受けられるサバイバルナイフ。

体に当たれば軽症ではすまない。

当てさせないが。

俺は体を右にスッと移動させる。

次の瞬間。

心臓めがけて差し出された右手を、俺は自分でも絶妙だと感心するタイミングでしゃがんでかわす。

そして、思いつきりその右手を蹴り上げた。

幽霊はうめきながら右手からナイフを落とす。

すぐに幽霊は拾おうとその身をかがめたが、遅すぎる。

俺はその隙をつき、がら空きになった腹に渾身の蹴りを続いて叩き込んだ。

ナイフを取るなどできようはずもなく、幽霊は数メートル後方に吹き飛ぶ。

俺はその無様な姿を確認して走り出し、仰向けに寝転んだ幽霊のおっさんにまたがる。

幽霊が今度は演技などとは到底思えない顔で怯えた。
それはそうだろう。

”死”が、目の前に迫ってきているのだから。

俺はゆっくりと右手を幽霊のおっさんのはげた頭に乗せる。
誓いを護るために。

「じゃあな」

右手に力を込め、願う。

滅せよ。

そうすれば、後は同じだ。

幽霊のおっさんは瞬く間にその体を粒子のように小さく分裂させながら、空に向かって上っていった。

いつもの”任務”のときと同じように、光り輝きながら。

まったく、最後だけは何度見ても綺麗である。

「あれ、もう終わったの？」

俺がその宙に上っていく粒子を見ていると、不意に後ろから聞きなれた声が聞こえた。

数分前の電話の相手である秋庭修吾あきはしゅうごその人だ。

「あんなおっさんの幽霊、苦戦もしなかったっての」

「あ、やっぱり？」

「使ってきた武器も普通のナイフだったしな」

「いつも向こうが使ってくる武器なんてそんなものじゃない」

「まあな」

俺はそれに後付するように続ける。

「じゃ、今日も任務は終了だ。お互い帰って寝るとしようぜ」

「そうだね。お疲れ様、宗一」

「お前もな」

携帯を取り出し時刻表示を見れば、午前3時20分。

俺はまだ眠ってない。これでは俺は明日の学校は睡眠授業になっ

てしまう。

急いで帰って少しでも多く寝るとしよう。

俺は修吾と逆方向を小走りで走り出した。

任務完了。

「眠い」

朝のホームルームを終えた、俺の通う私立高校2年1組の10分休み。

俺、神崎宗一かみざきむねいちは呟きながら一番後ろの自分の机に突っ伏した。

眠いのも当然だ。結局昨日は”組織”への連絡に手間取ってあの後2時間しか寝ていないのだから。

まったく、なんで俺は強制的にあんな組織へ入れられてしまったんだか。

……考えてもしょうがない。終わったことだ。

俺がもう今日は睡眠学習でいいやあとか思っていると、頭の上から修吾の声がした。

「宗一、あと3分ぐらいで英語始まるよ」

「知るかよ。俺は寝る。先生が指摘してきたらフォローよろしく」

「どうやってだよ。ほら、起きて起きて」

呆れたような声を出しながら修吾は俺の体を無理やり起こす。

「分かったよ、起きりゃあいいんだろ起きれば。まったく、昨日の任務で俺はクタクタだったのに」

「宗一なんてちょっと幽霊蹴っただけじゃない。僕のほうが大変だったよ。30分近く追い回してやっと公園に行かせたんだから。それよりさ」

「何だ？」

眠い目をこすりながら先を促させる。

「今日の放課後、僕たちの研究会に報道部の取材が来るんだって」

「はあ！？マジ！？」

「うん。本当」

めんどくさい。これで今年度3回目だ。ちなみに今は7月初頭。俺たち2人は、自分たちがときたま組織の任務のために夜を徹して活動することを怪しまれないための隠れ蓑として、『ミステリー研究会』という同好会を作った。もちろんメンバーは俺と修吾の2人だけだ。

まあ、どちらにしろ怪しげなのだが、ないよりいいだろうという修吾の案である。

「ったく、またあの長つたらしいこと説明するのかよ。本当にめんどくさいな」

「そうだよねえ。にしても、なんでこんなにたくさん取材くるのかな？ 別に僕たち、特に何をして活動しているわけでもないのに」
「……多分、誰かさんが非常に感慨深いお顔を持っているからじゃないですか？」

俺はじとつとした目で修吾を見る。

まったく、見れば見るほど整った顔立ちである。短めの黒髪に合うようにまつげは長くて目は切れ長だし、鼻はスツと通ってるし、唇の位置なんかも絶妙だ。

そう、実際のところ、報道部はほとんどそんな怪しげな研究部目当てではなく、コイツ目当てであることは間違いない。

第一、今年度過去2回の取材のことなど月一発行の学校新聞に載っていないかったし。

おそらく、この高校名物の学期に1回発行される『特別号』で、学校一とも囁かれているこいつのことを散々特集するのだろう。

そんな美貌を持つと自覚していないコイツがどんな顔をするのか楽しみだ。

ってか、それならそう断って取材しろってな。

こっちもなかなか疲れるのだ。毎回毎回”本当のこと”をしゃべり続けるのは。

「お、そろそろチャイムが鳴るから自分の席にもどれよ、修吾」

「なんか今宗一が言ったことが気になるけど……まあいいや」

即座に考えるのをやめ俺とは正反対の1番前の席に戻る修吾。

席に座った瞬間、1時間目の始まりを告げるチャイムが学校になり響き、同時に若い新任の教師が教室の戸を開ける。

さて。

じゃ、俺は寝よう。

修吾にちよつと言われたぐらいで収まるほど、俺の眠気は軽くないのだ。

後で修吾が何を言おうがかまうもんか。

おやすみ、俺。

第1話〜それが彼らの日常〜（後書き）

どうもはじめまして、天川というものです。

少しずつ更新していく予定ですので、生ぬるい目で見守ってくださるとうれしいです。

感想、叱咤激励などなど、ありましたらご遠慮なくどうぞ。

第2話　滅し屋

突然だが、この世に幽霊は実在する。

だが、世間一般で言われているような人を呪ったり、ましてや未練が残っていたからとか言って家族の前に現れて感動の再開をするような幽霊などは存在しない。

この世の幽霊とは、“復讐心”。つまり人を恨むような気持ちがあつてこの現世に残るらしい。

もちろん普通の人間は死んだらとつと上にいく。死んだことがないからよく分からないが、多分そうだ。少なくとも、復讐心を持たず、または少しか抱いていなかったらこの世ならざるところには行くようだ。

では、どんな人間が幽霊になるのか？

殺された人間だ。

人は殺されるとき、強い復讐心を心に秘めたまま死んでいく。それは、非常に大きなドス黒い心だ。

その黒い心を持つと、人は死して幽霊になる。強い復讐の心に身を苛まれた殺人鬼へと、その心を変える。

そして、復讐する相手を見つけるまで人を無差別に殺し続ける。

幽霊は、一応人の姿をしている。漫画みたいに、人の姿から突然変貌して怪物になったりはしない。

ただ、幽霊は見た目は変わらずとも人間の身体能力がもつとも高いと言われる18歳頃の身体能力で現世に現れるらしく、足が速ければ力も強い。

それに、大抵の場合武器を持っている。

どんな武器かと言えば、こう答えるのが1番簡単だ。

自分を殺した武器と。

ナイフで刺殺されたら、ナイフに。縄で絞殺されたら、縄に。拳銃で銃殺されたら、拳銃に。

ちなみに、手で殴り殺されたら手で殴り殺そうとしてくる。

自分の受けた痛みを思い知れ、みたいな感じらしい。

つと、ここまでが、俺たちの調べた幽霊の正体です……、

「これぐらい説明すれば十分ですかね？」

放課後のミステリー研究会、部室。

俺はいかにも2割本気、残りギャグと言った口調でここまでのことを目の前の椅子に座る報道部の女子生徒に説明した。

見たことがなかったから、新人生だろう。それにしても長髪で眼鏡をかけていてどこか大人びているが、まあいい。

その顔を見ながら、俺の隣の椅子に座っている修吾は半笑いを浮かべている。

まったく、馬鹿らしいことこの上ない。

実はここまですべて本当のことなのだが、1年前から組織に身をおき、幽霊と戦っている俺からしてもいまだに信じられないね。

事実は小説より奇なりみたいな言葉を聞くが、まさにそのとおりだ。

ここまで奇になると、最早向こうもギャグとして受け取ってくれるものである。だから俺たちも本当のところを話している。

変な嘘を言っただけに信じられ、自分たちが痛い人呼ばわりされるのもいやだろ、というこれも修吾の案なのだが……馬鹿らしいね。

さて、じゃあ後は報道部の目の前の女子が今までの話を綺麗に忘れて、コレ目当てとばかりに修吾のイケてる写真とって円満終了。

俺たちは机に広げた状態のランプで再び遊ぶと。

あ、これももちろん演出である。いかにもミス研は遊びでやります、みたいな演出だ。棚にはボードゲーム等多々あるし、ここまでやって俺たちの話を信じる人間はまずいない。

今回も……そう、半分はそのとおりになった。

「貴重なお話、ありがとうございました。では」
ここまで、いつもどおり。

問題、その後。

「組織の幽霊に関しての秘密をここまで話すということは、覚悟は出来ているようね」

「……………は？」

俺と修吾がその今までとは違う口調でのきっぱりとした言葉を聞き、固まる。

な、なんでコイツ、組織のことを知ってる？

しかしそれを聞く前に俺たちは完璧に無力化させられることになった。

すなわち、目の前で黒く光るそれに脅されて。

えっと、アレ、拳銃ですよね？

……………。

幽霊とは互角以上で戦える俺たちでも、さすがにいきなり人間にそんなあからさまな凶器を突きつけられては何も出来ない。

俺たち2人は考えるより早くさらにその身を固くする。

だが、

「まったく、話には聞いていたけど、まさかここまで洗いざらい全部語っていたとはね。さすがに組織自体についてはしゃべらなかつたみたいだけど」

そんな俺たちとは裏腹に女子生徒の口調は大分柔らかかった。

まるで、部下が何か失敗したことをたしなめる様な口調だ。

ん？ 部下をたしなめるような口調？

まさか。

「ひよつとして、八雲^{やぐも}さん？」

「正解。気づくの遅いわよ、宗ちゃんに修ちゃん」

「ちゃん付けはやめてくださいよ」

「同感です」

その声を聞いた途端、女子生徒、いや女子生徒の格好をした女性は拳銃を下ろし、眼鏡をはずして長髪のかつらもはずした。

そうして現れたのは、おおそ女子高生には見えない綺麗なショートカットの澄んだ目をした大人の女性。

まったく、半年以上会ってなかったとはいえ、何で声を聞いても分かんなかったんだか。

八雲雲雀さん^{やくもひばり}。政府直属の対幽霊秘密組織での、俺たちの上司だ。「別にいいじゃない。どっちも可愛い私の部下なんだし」

この俺たちをちゃん付けする人との出会いは、遡れば約1年前になる。

ある事件をきっかけに幽霊が視えて、さらに触れるようになった俺は同じクラスにいた修吾にいきなり「君、かなり霊感強いね。僕も霊感強いから分かるんだけど……え？ 視えて触れる？ よし、じゃあ組織に入って！」と勧誘され、強制的に夏休みになると同時に新幹線に乗せられ東京の大きくて豪華なビルに連行された。

そこで上司として出会ったのが八雲さんだ。

そこで俺は、彼女にいろいろなことを教えてもらったのだ。

今八雲さんに語った幽霊のことや、組織のことだ。

当たり前のことだが、幽霊なんて存在は世間一般には認められていない。いることが知れたら大パニックだ。しかし、その存在は決して多いとはいえないが確実に”いる”。

しかも幽霊とは自分を殺した人間への復讐を誓ってその心を黒く染め、無差別に人を襲うようになった人ならざるモノだ。放置しておいては、幽霊によって殺される人間が増加する。ワイドショーなんかでよく耳にする人間がやったとは思えないような猟奇的に刻まれた死体や、忽然と消えた人間などは大抵がその仕業だ。

それに対抗するために政府が秘密裏に作ったのが、”組織”だ。数十年前から存在し、全国から集められた視えて、触れる人がその幽霊を殺すために戦闘の訓練を受けて幽霊が各地で出現するたびに戦う。これはどうでもいいが、世界各国にも似たようなのがある。

最初こそ数が集まらず幽霊が出るたびに本当にどんなところへもそういう人たちは派遣されていたらしいが、近年では1つの市に1人が2人の人間を配置できるぐらいには余裕が出来たらしく、昔のように派遣されたりすることもないらしい。聞くとどうやら俺は、

訓練を終えられれば無事もとの学校に戻れ、やることをやれば普通の生活を送ることが出来るとのことだった。

で、そこまでを聞かされた後、俺は高校1年の夏休みをその戦闘の訓練とやりに費やされた。たまたま俺は空手を中学時代までやっていて、それも県大会常連ぐらいの腕を持っていたから夏休みいっぱいでもうにか終わらせることができた。後で修吾に聞いて知ったのだが、素人なら2、3年は当たり前だそう。修吾は近くの学校に通いながらとはいえ修了まで4年かかったらしい。

ただ、幽霊に対しての戦闘法は少し特殊だった。普通、喧嘩などの戦闘は相手との距離をいかに詰め、そして一撃でも早く強く叩き込むことこそが重要になるのだが、幽霊との戦いはちょっとばかり違う。なんと、自分は立った状態で相手を組み伏せると言うのだ。

理由はある。幽霊は普通に殴っても蹴っても死なない。しかも幽霊なのだから、触れるのはそういう人間だけで、武器なんて使っても無意味で全部通り抜ける。

幽霊を殺す方法は1つ。頭の上に手を乗せ、滅することを願う。

すると、幽霊はこの世からあの世へと移るらしい。

なんとも胡散臭かったが、実践でやってみたらそのようになったんだから何も言えない。

で、俺と修吾は夏休みが終わると共に地元へ帰り、今の仕事に就いた。お金ももらえるので、就いたが正しい。

そして俺の住む市で事件もしくは事故があるたびに、その犠牲者を夜な夜な探してはあの世に送るといふ仕事をしながら今に行き着くというわけだ。

ちなみにそのような人間は組織内と事情を知る政府上層部のみではあるがこう呼ばれている。

”滅し屋”と。
ほろほ

「にしてもさあ」

俺が過去の思い出にスリップしていると、八雲さんは椅子によっかかり楽な姿勢を保ち俺たちに言う。

「さつきも言っただけど、まさかあんたたちが、ここまでペラペラと本当のことをしゃべっていたとはねえ」

「別にかまわないでしょう。誰も本当のことだなんて思いもしないでしょうし」

俺が答えると、八雲さんは存外あっさり同意する。

「確かにね。たださあ、やっぱりあんたたちの上司としてはあんまり本当のことしゃべられると困るわけなんだよねえ。一応、世間的には幽霊っていう存在はないことになってるんだから。だから、次からはもうちょつと嘘も織り交ぜるようにしてくれない？ ほんの95パーセントほど」

どかが『ほんの』だ。ほとんど全部じゃないか。

「考えておきます」

俺がそう適当に答えると、八雲さんは手に握っていた拳銃を制服のポケットにしまう。たく、そんなモン持つてくるなよな。

それを見ながら、修吾が思い出したようにその制服姿の容姿を見ながら至極もつともなことを問う。

「そういえば、何でそんな格好してるんですか？」

すると、ふと何かに気づいたように八雲さんは小悪魔的に笑った。そしてその体を見せ付けるようにポーズを決める。

「似合う？」

八雲さんはかなりプロポジションがいい。

正直、そんなポーズをじっと見てると悩殺されそうであることは言うまでもない。

もちろん言えないが。

「セクシーポーズはいいですから答えてくださいよ、八雲さん」

どうにか冷静さを保った自分に賞賛を送りたい。

「連れないわねえ。実は今年からこの学校に私の従姉妹が通っているんだよね。そいつが報道部に入ってるから、あんたちの評判どうなのかなあゝって思ってたけど、話を聞いてみたのよ。2人が怪しげな同好会作ってるのは知ってたからね。で、聞いてみたら従姉妹は信じていなかったけど、あんたたちが幽霊の話を吹聴してるっていうじゃない。これは止めさせないとあつてことで、別の用事もあつたし従姉妹から制服借りてここにきたの」

「結局、その制服は遊び心ってわけですか」

「そういうことね」

八雲さんは20もそこそこの年齢の割にはどこか子供っぽい。

こんなこと、まともな大人なら絶対やらないだろうってことを平気でやってくる。

本人曰く、『人間皆死ぬまで子供』が座右の銘らしいから困り者だ。

職務には割りに忠実なんだけどなあ。

「じゃあ、僕が朝聞いた今日の取材の予定って嘘だったんですか？」

「うん。私、従姉妹が授業終わるまで制服借りれなかったからね。」

従姉妹が学校にいる間に修ちゃんにそう言っというって頼んだの」

「ああゝ、そういえば、僕たちに取材があるって言っていた女の子、言われてみれば八雲さんと似てるかも」

修吾が妙に納得する。

まったく、それぐらいすぐに気づいてくれよ修吾。拳銃突きつけられたときは本当にびびったんだから。

にしても、取材が嘘ってことになる、じゃあもう今日はここにいる理由はないってことになるな。

「おし修吾、感動の再開も終わったんだ。俺たちに会いに来たのはついであらしいし、帰ろうぜ」

そう提案しながら、俺は立ち上がって机の横に置いておいた鞆を手取る。

「もう帰っちゃうの！？ 宗ちゃんひどいなあ。まあいいや。用事

が終わったなら宗ちゃんの家には押しかけるから」

「勘弁してくださいよ」

俺の住む市、桜花市は都会ではない。田舎おつけと言ってもいい。深夜だと大通りですら車がほとんど通らない。

そんなところで、八雲さんみたいな美人が家に着たなんてのを学校の誰かに見られたら、それだけで次の日どうなるか分からん。

俺がそんなことを考えていると、再び修吾が気になる単語でも見つけたのか八雲さんにその目を向ける。

「八雲さん、さっきから言ってる用事って、何ですか？」

この人の用事なんてきつとたいしたことじゃないだろうよ修吾。きつと、その従姉妹とやらの家にあるものでも適当に貰っていいとかそんな感じだろ。

あ、そういえば昨日、俺ここのロッカーにクラスの笹塚に借りた映画のDVD入れっぱなしにしちまってたんだ。家で見よ。

修吾の質問を俺は右から左に流すことに、俺はDVDを家に持ち帰るべくロッカーに近づく。

「ああ、それ？ まあ、あんたたちになら言ってもいいか」

俺はロッカーの取っ手に手をかけ、手前に引く。

「実はね、ここの隣の市を担当している滅し屋がさ」

ガコツと小気味よい音を立ててロッカーが開く。

その瞬間、

「死んだの。幽霊に返り討ちにされて」

「え……？」

そんな八雲さんの衝撃の言葉に修吾が驚愕するまさにその瞬間、

「は？ う、うわっ！」

「きゃあ！」

俺は、ロッカーから降ってきた柔らかいモノに押しつぶされた。

同時に、ロッカーから雑多に多彩なものが振ってくる。

棚に並べていないボードゲーム各種に借りたDVD数本に見せ掛けだけの幽霊について書かれているデタラメな本等などエトセトラ

エトセトラ……。

それらの猛攻が一通りすんだ後、修吾と八雲さんが同時に口を開く。

「あ、今朝取材があるって言ってた女の子？」

「真帆！？」

「う、ごめんなさい！！」

状況がまったく理解できない俺の上でそれがいきなり謝りながら動き、俺の上から降りる。

どうやら、ロッカーから降ってきたのは人間だったようだ。

俺もどうにか起き上がり、その真帆と呼ばれたこれまたうちの制服を着た女子を凝視する。

第一印象。可愛い。

第二印象。目はパッチリ、鼻もスツとしていて、頬がちょっと赤く、しかし活発そうな印象を受ける。

第三印象。俺の主観だが、八雲さんを幼くしてさらに綺麗から可愛に移行したような感じ。

結論。

「や、八雲さんの従姉妹か？」

「あ、はい！ 椎名真帆しいなまほつています」

「……なんで、ロッカーから沸いて出たの？ 真帆？」

俺は椎名という後輩の女子に向けていた目を、ゆっくりとその声を発した主に移す。

か、顔は笑っているが目が笑っていない……怖い。

隣にいる修吾なんてすり足で後ずさっているぞ。

そしてどうやら、怖いと思っているのは俺や修吾だけではないようだった。

「お、お姉ちゃんごめんなさい！ じ、実は私高校の制服2着持っていてそれでそれでお姉ちゃんこの先輩について何か知っているようだったから気になってそれでそれでちょっと隠れて話し聞いてみようかなあって思ってたロッカーに隠れたの別に幽霊のことなんて

何にも聞いてないから安心して！　じゃ、じゃあ私はこの辺で帰ろうかな！　じゃ、じゃあね！」

「待ちなさい、真帆」

「はいい！！」

最早妖気すら発しかねない八雲さんが、立ち去ろうとした従姉妹の椎名をそのやばすぎる目で見つめる。

こ、怖すぎる。

「あんた、全部聞いちゃったのね」

1歩、歩き出す。

語尾にクエスチョンマークが付属するような口調ではない。

つまり、八雲さんの中ではそれはすでに確定情報なわけで。

まさかここまでの俺たちの会話を聞いてまでそれが冗談だと思うような人間はいないわけで。

つまりそれは、組織の機密情報が外部に漏れたってわけで。

えっと、つまりそれは、組織の規則にのつとると、彼女の口封じをしなければならぬわけで……って！

「ちょ、ちよつと八雲さん！　まさか自分の従姉妹にそんなことしませんよね！？」

「そ、そうですよ！　彼女賢そうですし、分かってくれますって！！」

八雲さんの発する気配から俺と同じ結論に達したのか、修吾も俺に加勢する。

しかし、八雲さんの目の輝きは変わらない。

「宗ちゃん、修ちゃん」

「はいい！！」

綺麗に声がハモる。

「分かって」

いやいやいや！　今俺の目の前で尊き生命が失われそんな状況で分かるも何もないだろう！

俺たちがそんな会話を繰り返す間に、八雲さんは1歩ずつその

差を詰めていく。

椎名は半ばわけが分からず、迫りくる恐怖に硬直している。そして、ついに八雲さんと椎名の距離がなくなる。

「真帆」

吐息がかかる距離まで顔を近づける。

「な、何？」

「今の話は全部嘘。いい？」

「……う、うん」

「宗ちゃん、修ちゃんもいい？　今の話はすべて嘘。分かってるよね？」

「……はい。嘘です」

ホッとした。

今のこの人、本当に従姉妹でも殺してしまいそうな雰囲気だったぞ。

俺は安堵のため息をつく。

まさか、ここまで言われてうっかりじゃべってしまっただ椎名も物分りが悪いことはないだろう。

よかった。

「じゃあ真帆、私は一足先に真帆の家に行かせてもらっから」

「わ、分かった」

「それじゃあまたそのうちにね、宗ちゃん、修ちゃん」

「ええ、また、そ、そのうちに」

俺が臆しながらそう返すと、八雲さんは満足したような顔をして部屋を後にした。

あの人、敵にまわすと怖いだろうなあ。

八雲さんに狙われる幽霊に少し同情する。

と、俺が少しの間立ち尽くしていると、修吾が椎名に向かって声をかける。

「真帆ちゃん、だっけ？」

「はい。秋庭修吾先輩ですね？」

「あ、名前知ってたんだ。嬉しいなあ」

次いで修吾の満面とも取れる笑み。

椎名が一瞬フリーズする。

おいおい修吾、お前、自分の笑顔の凶悪性を少しは自覚しろよ。

しかし椎名はそれでも、修吾の笑みからのリカバリーは早いほうだった。割りかしすぐに、今度はこちらに顔を向ける。

「それで、こちらの先輩が神崎宗一先輩」

「へえ。俺の名前も知ってたのか」

「それはもう、報道部ですから」

椎名が得意げに胸を張る。

ってか、報道部の人間と言うのは皆が皆学校の全員の名前が分かるものなのか？

「そして、2人ともここの部員で、部長が秋庭先輩で副部長が神崎先輩」

「まあな。お前は報道部の新入部員で、八雲さんの従姉妹ってわけか」

「はい。えっと、よく分からないんですけど、お姉ちゃんがいつもお世話になってます」

ペコリと頭をさげる椎名。

それを見て、俺と修吾は顔を見合う。

「いつもお世話になってるのは僕たちの方なんだけどね。真帆ちゃんはお姉ちゃんと仲がいいの？」

「ええ。多分……ですけど」

「多分？」

「だってお姉ちゃん、何度聞いても自分の仕事のこと何にも教えてくれないんですから。それで、今日こそは！　って思ったんですけど……」

「なるほど。ああ言われたってわけか」

「はい……」

俺は数分前の出来事を思い出す。

まあ、人に言える仕事じゃあないからなあ。椎名の気持ちも分かるが、八雲さんの気持ちも分かる。

「俺が言える義理じゃあないが、あまり深入りしないほうがいいぞ。八雲さんが言っていたように、嘘だと思うことが1番だ」

「うん。僕もそう思うな。ごめんね」

「でも」

何かを椎名は言いかけるが、こいつの何を思いきつくそれを遮る。

「いいか？ さっきは俺たちや八雲さんだったから許してくれたんだ。こんなこと言いたくないが、これがもつと律儀な奴だったら前はもうここにいないんだ。分かってやってくれ、八雲さんのためにさ」

「……分かり、ました」

思い悩むように俯いてしまったが、それでもしつかりそう彼女は返事をした。

気持ちは本当に分かる。高校1年にもなったら、身近にいる人の職業ぐらい気になるものだ。

だが、このことばかりは深入りさせてはならない。さっきの彼女の早口の中身を分析する限りだけでも知りすぎているぐらいだ。これ以上は無理だ。彼女のためにも。

「分かったなら、今日はもう帰ったほうがいい。すぐに俺たちも帰るしな」

「は、はい。失礼します」

そう一礼し、椎名は八雲さんと同じく教室を後にする。その姿は、どこか八雲さんに似ていたように見えた。

って、そういえば八雲さん、制服のまま廊下出たよな。大丈夫かな。

などとその後ろ姿を見送りながら考えていると、

「ねえ宗一」

「なんだ？」

「アレ、どうするの？」

「アレ？」

俺は後方、修吾が指差す方向に向かいゆっくり振り返る。
見てしまい、後悔する。

しまった。

「ロッカーの物、ばら撒かれているな」

「僕たちが片付けるしかないよね」

「……椎名の奴。せめて後始末ぐらいしていけよな」

とは言っても、強制的に返したのは俺だ。文句は言えない。

「仕方ない。片付けよう、修吾」

「そうだね」

その後、絶妙のバランスで入っていたらしく入れなおすのに多大な時間を労したこの作業のおかげで。

俺たち2人は、2つほど大きな失敗を犯していたことに気づけなかった。

第2話　滅し屋　（後書き）

楽しんでいただけましたでしょうか？

今後も頑張りますので、お付き合いしてくださるとうれしいです

第3話〜エネミー〜

翌日。

「そついやぁ宗一に修吾」

「ん？ どうした笹塚」

学校の昼休み。

俺と修吾、それに同じクラスの笹塚と西園寺の4人が弁当を広げると同時に、最初に口を開いたのは笹塚だった。

「どうしたじゃねえよ。お前等、昨日のことで何か身に覚えはないのか？」

俺にDVDを貸してくれた笹塚が胸に手を当ててみると言わんばかりの威勢のよさでまくしたてる。

「？ 何かあったわけ？」

修吾は首を傾げたが、コイツの性格を考えると俺にはなんとなく予測がついた。

それでも自分がもてているという自覚の無いような修吾と違い、俺はそれなりに察しのつくほうだ。さらに俺は笹塚、西園寺共に修吾以上に詳しい自信がある。

「昨日、取材にきたのが誰かってことだろ？」

「やっぱ身に覚えがあったか。女だというのはもう調べた。で、どうだった？」

「ルックスか？」

「聞きなおすまでもねえだろ」

そつ、まず笹塚は女好きだ。しかも基本的に顔とスタイルで選ぶ自分のルックスは並なのに高望みしすぎである。

「そつだな」

おそらくコイツの調べたと断言する女とは八雲さんのことだろう。しかし、俺は学生ということで、椎名のほうを思い浮かべる。

「お前が喜びそうな顔ではあったな」

ロリコンだから。

「な、修吾」

「よく分らないけど、宗一がそう言うならそうなんじゃないかな」

「ま、マジで！？ 紹介してくれよ！」

「出来るかよ」

「そこをなんとか！」

「笹塚、今のお前、大分気持ち悪いな」

「う、うるせえ西園寺！」

「逆ギレかい。情けないなお前」

逆に修吾、西園寺は女にそこまで興味を示さない。

修吾は女子と話すぐらいは普通にするが、西園寺は毛嫌いしているところがある。昔酷い振られかたをしたからだろう。俺もその現場にいたが、あれはひどかった。

「いいかい？ お前はどうかやら世間一般に見て可愛いと呼ばれる人間と付き合いたいと思ってるらしいが、よく考える？ 所詮学生の恋愛など妄想だ。本分は勉強にある。俺はお前を哀れに思うな。そんなことにいつまでも気づかずに告白しては振られていくんだから。そんなだと、将来成功しても女に貢がされて終わるぞ」

そして西園寺は妙に饒舌で冷めている。

眼鏡を押し上げながら語る西園寺は理論家というか現実的というか。まあ、そんな感じだ。

「お前、んなこと言ったら生涯一人身になるぞ」

「笹塚に言われたくはないな」

「告白する勇気のない人間よりマシだ」

「甘いな。俺は結婚などという人生の墓場の代名詞に自ら浸かろうとは思っていない。一人暮らしの何が悪い？ 近年賢い奴はそう考えるから一人世帯が日本で増えているのだ」

「……もういい」

「わかればいいのだ」

結局、いつも西園寺が馬鹿の笹塚に意図的に詭弁を語り、笹塚が

言い返せなくなつてこの戦いは終わる。

ある意味熱血漢と女嫌いのリアリスト。この2人、俺は水と油ぐらいに合わないのになんで一緒にいるんだろぅな？ 分からない。

まあ、2年間こうで大きな喧嘩もほとんど起きないのだ。口じゃあこつでも、仲が いいのはお互い無いものを持つてゐるからかもしれない。

そんなことを考えて、1人納得する。

と、そのときだった。

お互いの見合わせた顔が何かに反応して驚きの表情を露にする。

俺と修吾の携帯が同時にバイブル機能により震えたのだ。

同時、とくれば送信元は学校外なら友人の可能性が高いが、学校にいる時間帯だと大抵が組織がらみの人間だ。それも、普段組織は携帯にメールなど送らない。基本的に幽霊駆除は個々が勝手にやるものだからだ。まあもちろんサボつていればメールや電話はすると思うが、そんな奴の噂は今まで耳にしたことがない。だから、組織がメールをするというのはかなりレアケース。早い話がイコール緊急事態だ。

「ん？ メールか？」

「うん、ちよつとね」

修吾が断りを入れ携帯をポケットから取り出し、周りに見られないよう注意しつつメールを開く。

もちろん俺もすぐに黒い携帯をポケットからだし、メールを開いた。

そして驚愕する。

「……………マジかよ」

自然と口からそんな言葉が漏れた。

あり得ないような内容が携帯の画面に刻まれていた。

それは修吾も一緒だったのだろぅ。口をポカンと開けて絶句している。

だが、俺も修吾も次取るべき行動はその数秒後にすぐに決めた。

「悪い、笹塚に西園寺。俺、学校抜けるわ」

「僕もそうさせてもらう」

「へえ。2人が早引けするとは珍しいな。何が書いてあったんだ？」

「ちよつと知り合いが病院に運ばれたみたいでな」

荷物を鞆に詰めながら口にした台詞は嘘ではない。本当に知り合いが病院に運ばれたのだ。

「じゃあ笹塚、西園寺。後任せるから」

「あ、ああ。担任には適当に言っておく」

「助かる」

俺はそう礼をし鞆を背負い、教室を後にしようと駆け出す。

「じゃあね」

そんな容姿を見つつ、笹塚はわざと俺たちに聞こえるように愚痴をこぼす。

「ったく、その様子じゃあ、お前等今日も夜は忙しいのかよ。今日の合コンは2人も誘おうと思っていたのによ。こうなりや西園寺でもいいや」

「誰がいくか。俺は今日家族で花火をやるらしいんでね。それに付き合わないきゃならないんだ」

「マザコンが」

「弟のためだ。大体お前はロリコンだろう」
「ぐっ」

修吾もほぼ同時に、突き刺さるクラスメイトの視線を受けながら

約2名除く 教室を抜け出し、俺を追った。

「おいおい、修吾。あの人が病院送りって、一体どういうことだ？」
玄関で靴を履き替えているところへ修吾が俺に追いつく。答えなんかでないと分かりつつ聞いてしまう自分に少し呆れた。

「そういえば昨日あの人、隣の市で『滅し屋が幽霊に殺された』とか僕たちに教えてくれてたよね」

「そついやそうだったな。くそ、ロッカーから人が降ってきたせいでそんな異常事態のこと、すっかり忘れてた」

昨日の自分が情けなく感じられたが、今更嘆いても仕方がない。
とにかく今は病院に行くしかない。

俺は玄関を出て学校の裏手に回る。この学校の裏手には自転車置き場があり、裏門から敷地外に出ることが出来るようになっていたのだ。

しかし、俺は学校に自転車を通つてなどいない。俺は自転車置き場のさらに奥へと走り、よく似た形の別の物の置き場へと向かう。フリーダムな学校で助かった。

俺は自分の原付バイクにまたがる。

「修吾、乗れ」

「ありがと」

俺が言うより早く、修吾が俺の後ろの開いたスペースに自分の体を入れる。

それを腰にまわしてきた手の感触で感じ取り、俺は原チャリを急発進させた。すぐに学校が見えなくなる。

バイクは大通りへと繰り出し、原チャリの法定速度いっぱい、時速30キロ前後のスピードで進む。こんなときまで交通ルールを守る自分はちよつと偉いと思う。

そう、『こんなときまで』と言っても申し分ない内容のメールだった。メールには八雲さんが今日の朝この市で1番大きい病院に運ばれたことが載っていたのだ。1時ごろまで八雲さんの病院からもうとも近い俺たちへの連絡がなかったところを見ると、組織のほうでも確認が遅れたらしい。

ただ、こうしてバイクに乗っている今でも信じられなかった。

あの人は普段こそ少しふざけた感じだが、組織の中でも指折りの力を持つ実力者だ。だからこそ俺たちの上司という立場にいるのだし、常に東京の組織のほうにいる。

八雲さんの仕事は俺たちと同じ滅し屋だが、俺とはまったくの別格だ。滅多にないことで1度しか聞いたことがなかったからすっかり忘れていたが、あの人は大火事やテロなどで多数の幽霊が現れた

場合にのみその現場に行き幽霊を滅ぼす、非常勤の滅し屋だった。それも、あの人の手際の良さと実力がいいからそんな特殊な役割であることは言うまでもない。

そういえば、そういう大規模な事件以外。例えば滅し屋を振り返り討ちにするほどの強力な幽霊が出た場合にも仕事があるってしゃべってた気がする。

くそつ、ここ最近そんな大事件なんてなかったから、あの人がそんな用事でこっちに来ているなんて思ってもいなかった。

メールには、八雲さんの生死については触れられていなかった。つまり組織のほうでもそこまで調べられなかったってことだ。だから俺たちに学校があるにも関わらず病院に向かわせた。

「無事でいてくれよ」

自然と口から無事を祈る言葉がこぼれる。

早く病院について欲しい。

そんな願いが叶ったのか、気がつくとすでに病院が見え始めていた。

桜花中央病院。外科、内科共にこの桜花市でもっとも大きい病院だ。八雲さんは今朝、ここに運ばれたらしい。

俺は駐車場に原チャリを止め、修吾と一緒に表玄関から病院へと入る。

受付には数名の看護師がいた。息つくまもなく看護師に向かって俺は八雲さんの所在をまくしたてる。

しかし、そんな慌てる俺をよそに、看護師の人は冷静だ。

「今朝入院されました八雲雲雀さんですね。えーっと、803号室です。8階ですよ」

その言葉を聞き俺は素直に安堵し、息を吐いた。安心したのだ。どうやら命に別状はなさそうだし、面会も出来るようだ。

「ありがとうございました。行こう宗一」

「ああ」

修吾に短く返事をする。

そこへちょうどエレベーターが降りてきたので、俺たちはそれに乗り込んだ。

大きな病院だけあり、立派なエレベーターだ。

「ねえ。八雲さんがやられるほど強い幽霊って、どんなだと思う？」
エレベーターが上へと向かう短い時間の中、修吾が俺に意見を求めてきた。

「ちよつと考えられないな」

率直に思ったことを口にし、後を続ける。

「あの人の実力は折り紙付だし、幽霊に対しては情けもかけない。お前も分かってるだろ？」

「そりゃあね。でも、事実殺されないまでも病院にいるんだから、存在する」

しかし修吾の言うことも至極まともだった。当たり前だ。実際に八雲さんはどんな理由があつたにせよ返り討ちにされてここにいるのだ。

「まあな。でも、ここで俺たちが議論しても仕方がないだろ。八雲さん面会できるみたいだし、直接会って聞いてみようぜ」

「そうだね。あ、着いたみたいだよ」

俺と修吾は八雲さんが入院している8階で降りて、小走りで803号室へと向かう。

幾度か人とすれ違い、その人たちは俺たちの制服姿を見て隣人と何事か囁いていたが、特に何も話しかけてはこなかった。

エレベーターから少し離れたところにその病室はあった。ドアの右上に張られているプレートには『八雲雲雀』と記述されている。
「ふう」

俺はドアを開ける前に1度深呼吸をする。

特に深い意味はないのだが、なんとなく人の病室に入るときは緊張するものだ。

「失礼します」

ひっかくような音を立てドアが開かれる。

俺たちは吸い込まれるようにその中へと入った。

その部屋は病院というイメージを損なわず病室は白で統一されており、清純な雰囲気醸し出していた。

誰が用意したのかベッドの横の机には花瓶が置いてあり、鳳仙花が1輪病人を元気付けるように力強く咲いている。

1人部屋らしく、ドアから最も離れた窓際にぼつんとベッドが置いてあった。

「八雲さん……」

そこに彼女はいた。

「あら宗ちゃんに修ちゃん。どうしたの？」

何故かこちらの気も知らずに大量の漫画をベッドの脇に置きながら。

もちろん本人はうち1冊を開きながら手に持っている。

「どうしたのじゃないですよ。これ何ですか？」

「面白いわよ、この漫画。あんたたちも読む？」

「そうじゃなくて！ えっと、僕たち組織のほうから八雲さんが病院に運ばれたって聞いてここにきたんですけど……」

「それはご苦労様」

「なんか、普通に元気ですね」

俺の棒読みの言葉に八雲さんは笑い出す。

「ハハ、まあね。ちょっつと腕にやけどしただけだから」

「や、やけど？」

「まさか八雲さん、後残ったりしませんよね！？」

八雲さんの台詞に驚いたのか、修吾は声を大きくする。

八雲さんはモデル並のプロポーションを持っている。それに肌も常人より白くて綺麗だ。

俺も修吾も八雲さんには恋愛感情とまではいかないが、少なからず好意は抱いている。

そんな人やけどの痕なんかで将来を台無しにして欲しくはない。だが、そんな俺たちの不安を溶かすようにまた八雲さんは声高に

笑い出す。

「アッハハハ！ 大丈夫大丈夫。確かに少し後は残るけど、そんなに大きなものじゃないし。それにいざとなったら責任は取ってもらうし」

「誰にです？」

「宗ちゃん」

「えー？ いやまあ俺は別に八雲さんなら……って、何で俺なんですか！」

「冗談だつて。ま、宗ちゃんがこんなおばさんが好きならそれでもいいけど？」

「……遠慮しときます。散々にかかわれそうですから」

一瞬『いいかも』と思つた俺つて一体……。

「じゃあ私は修ちゃんでもいいよ？」

「僕も辞退します。きっと八雲さんは僕なんかよりいい人が見つかりますからね」

「口がうまいなあ修ちゃんは。宗ちゃんとは大違い」

「余計なお世話です」

修吾にとってこの手の話題は日常茶飯事だ。

本人に自覚があるのかは知らないが、口が上手いのも当然だろう。俺が苦笑いしながらそう返すと、八雲さんは持っていた漫画をベツドの脇にある机に置いた。

そして急にさっきまで冗談を言っていたのが嘘のように神妙な顔を表に出す。

「でも、ありがとね。今日学校あったんでしょ？ わざわざ抜け出してまでお見舞いに来てくれて」

「まあ、上司の心配をするのも仕事のうちですからね。それより、何があつたんですか？」

俺もそれに呼応するように気になっていた本題を切り出す。修吾もさっきまで弛緩していた顔を真剣な顔つきに変えた。

八雲さんは1つ小さく息を吐く。

「ちょっとミスっちゃってね」

そう前置きしてから、八雲さんはゆっくりしゃべりだす。

「私が隣の市の滅し屋を殺した幽霊を始末しに行ったのは知ってるよね？　それでさ、私は夜に家をでたの。そして、幽霊の撒き散らす霊力をたどって私は問題の幽霊を発見した」

霊力とは、幽霊や俺たちのような視える人が持っているものだ。

幽霊はその存在を認識していないようだが、俺たちはそれを利用して幽霊の場所を探し当てたりする。

八雲さんは俺たちに向けていた視線を下に降ろす。

「あんたたちが会ったことないと思うけど、その幽霊、もう”自分を殺した人を殺した幽霊”だった」

……会ったことはない。ただ、滅し屋の間で噂になっているくらいには聞いたことがあった。

幽霊は自分を殺した人を殺すためにこの世に残り、その目的を達するまで無差別に人を殺す。

では、仮に自分を殺した人を幽霊が殺した場合、その幽霊はあの世へ行くのか？

答えはノーだ。この世に生き続ける。

それも少しばかりではなく性質が悪くなる。

まず、幽霊が自我を持ち始める。生前のような性格ではない。殺しに快楽を覚え、イカれた性格を作る。

次に、知能レベルが発達する。普通の幽霊は片言でしゃべれるかどうかだが、そいつらは自分の年齢相応の知能を取り戻す。原因ははつきりしていないが、組織の研究員の間では『幽霊が目的を果たすことにより脳が安定し、記憶を取り戻す』という見解が強い。

そして3番目の最後。コレが1番厄介なのだが、肉体が少しこの世のモノに近づく。靈感のまったくない人間にまで視えることはないのだが、少しでもあると視えるようになり、また視える人間は標的にされる。さらに、己の意思でこの世の物に触れるようになる。普通の幽霊でも一応命のないものには触れると言えば触れる。だが、

自分からは決して触らない。それに対し、知能レベルの発達によりそういった幽霊は自分の意思でこの世の物を触ってくるのだ。

それはつまり、自分を殺した武器以外のナイフや金属バッド等はもちろんのこと、まずありえないが下手をすればマシンガンだって使用できるようになることを意味する。

だが、そんな幽霊は過去に指の数を超えるほどもいなかった。大抵が1日経たずに滅し屋に消されるからだ。

それに、そういった厄介な幽霊がでてきても、八雲さんが負けるとは思えなかった。確かに頭はよくなるし、力も上がり確実に強くなりはするのだが、八雲さんはそれを凌駕するエリートだ。俺たちならいざ知らず、八雲さんならてこずりはするかもしれないが負けるとは考えられない。

そう思った。が、黙って八雲さんの話を聞くうちに理由が分かった。

「昨日あんたたちに会った後にちよつと調べただけだね。交通事故故だったんだ。運転手は事故った後自分だけ車からすぐに逃げたから生きていたんだけど、轢かれた2人の人間はどちらも死亡。そいつは車の炎上による焼死が直接の死因らしくてね。ほら、そういうタイプって厄介でしょ？ 直接の死因が炎に焼かれてだから、武器は使わないけど手から炎を出してくる。でも、私は油断さえしなければ勝てると思ってたし、多少てこずったけど実際に追い詰めた。でも、そこで予想外のことがあったの」

「予想外のこと？」

「久々の仕事でさ。相手の強さも未知数だしで少しテンパってたんだと思う。実はそのとき、真帆が私の後をつけてたの」

「し、椎名が！？」

「そ。私の実家って代々神社でさ。生まれつき靈感が強かったの。真帆はまだ弱いほうで私みたいに視える触れるってことはなかったんだけど、それでも復讐を終えて人間に近づいた幽霊の姿は見えた。幽霊は私より先にその姿を見つけて、私に消される寸前に物陰にい

た真帆を狙ったの。多分顔が似ていたから親類だろうって分かったんだと思う。で、私は真帆をかばって右手にやけどを負って、その隙に逃げられたってわけ」

……後半部分は少し明るい口調に戻った八雲さんが事のあらましを話し終える。

「？ だんまり決め込んでどうしたの？」

だが、俺と修吾はしばらく押し黙ったままだった。

知っていたからだ。椎名が、八雲さんの職業に興味を抱いていたことを。

あいつは言っていた。

『だってお姉ちゃん、何度聞いても自分の仕事のこと何にも教えてくれないんですから。それで、今日こそは！ って思ったんですけど……』

『今日こそは』なんて言ってるってことは、過去に何度か似たようなことをやってたってことだ。俺たちは気づこうと思えば気づけた。

でも気づけずに、おめおめと八雲さんの後をつけさせ、あろうことか八雲さんに怪我をさせる事態になってしまった。

椎名は悪くない。確かに尾行は褒められた行為じゃないが、教えてくれない八雲さんの職業に興味を持つことは悪いことじゃあない。悪いのは俺たちだ。気づけなかった。椎名がそこまで強くそれを知りたがっていることに。

昨日の部室で、八雲さんが少し厄介な幽霊と戦うことは知っていた。それに椎名がそういう感情を持っていたことも分かっていた。

でもどちらも気づけず、こんな結果を招いた。

俺たちは2つ、大きな失敗を犯していた。

きつと今頃、椎名は自責の念にとらわれている。自分が悪いと思いついて入っている。

八雲さんも口じゃあ明るい風を装ってるが、従姉妹にそう思わせってしまったことに実際は心を痛めているだろう。

俺にも同じような経験があった。なのに。

なんで、俺は気づけなかった？

「八雲さん。真帆ちゃんって、今どこにいるんですか？」

そんないまだ黙りこくってる俺よりさきに、修吾が問う。

「さっきまでここにいた。ここまできたら隠し通せないなって思ってた私、真帆に全部教えたんだけどさ。それ聞いた後真帆どこかにいつちゃったんだよね。でも、まだ病院内にはいると思う」

「ありがとうございます。じゃあ八雲さん、お大事に」

修吾が俺の手を軽く引く。

「あ、ああ。じゃあ失礼します八雲さん」

俺たちは八雲さんから視線をはずし、背後にある病室のドアを開ける。

「多分2、3日中には退院できるから、組織にはそう連絡しておいて」

「分かりました」

修吾がそれだけ言って病室の扉を閉め、面会は終わった。

「椎名に会うのか？」

そして、俺は次は目線を修吾に合わせる。

「うん、そのつもりだよ。きつとき、真帆ちゃんは八雲さんの怪我は自分が悪いって思い込んでると思うからね」

自分でも想像がついていたことだが、その台詞を人の口から耳にして俺は1年前を思い出す。

すべて自分が悪いと、思い込むこと。

俺もあの言葉を思い出すまで、そうだったことがある。だからこそ俺は椎名の気持ちがなんとなく分かる。

「修吾、俺も経験があるから分かる。そう思い込んでしまったら、人はとことん落ちるところまで落ちるぞ？ 人の言葉に耳なんて貸さない。最後まで自分が悪いと、自分を貶めるぞ？」

「じゃあ宗一は、今もあのことは自分が悪いと思ってる？」

「！それは」

否定しようとしたところに、さらに修吾がそれを許さず続ける。

「宗一が違うんなら、今宗一が言ったことは間違いだよ。真帆ちゃんだって例外じゃないよ。だから、真帆ちゃんを僕は探す」

言い切つて、優しく笑いかける。

「……そうだな」

まったく、コイツには頭が上がらないな。無駄に口がうまい。顔がいいのに加え口も上手いからあんなにもてるのだろうか。

ハア。と、ため息を1つつく。

じゃあ椎名はこいつに任せて、俺は組織に連絡でもして待つてるかな。

「修吾」

階段に向かおうとしていた修吾を呼び止める。

「なに？」

「椎名を口説くの、任せるぞ」

「怒るよ？」

「冗談だつての」

「勘弁してよね」

俺たちはお互いに軽く笑いながら、その場を後にした。

第3話「エネミー」(後書き)

楽しんでいただけたのなら幸いです
感想、批評などありましたらぜひお願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1011d/>

滅し屋～夜空に咲く花～

2011年1月13日03時00分発行